

第二部門 〈子どもの育成に関する論文・実践記録またはエッセイ〉 入選論文

実践記録 「いじめ問題について」

大
菅
新

おお すが あらた
大 菅 新 さん

[略 歴]

年 齢 62歳
住 所 京都府京都市
経 歴 京都産業大学理学部物理学科卒業
1974年より公立中学校理科教員として38年間勤務
(財)世界人権問題研究センター会員
著 書 「差別への凝視(365日が3回)」
(文芸社 2006年)
「ヒューマンライツエッセイ反骨いまだからこそ」
(東京図書出版会 2007年)
「ピーヤ・鎮魂の墓標」(東洋出版 2008年)
「人類館殺人事件」(東京図書出版会 2013年)
「キラカムイ」(創栄出版 2013年)
「消却の樹影」(北辰堂出版 2014年)

[応募動機及びコメント]

今、全国的にいじめの問題が深刻化しています。自らの30数年に及ぶ担任経験から、いじめの問題に対してどのように対応してきたか、自身の具体的な実践の中から、解決に至った取り組みにおける考え方や対応のポイントをまとめました。少しでも現役の先生方のお役に立てば、という思いで書き綴ったものです。

今回、このような素晴らしい賞をいただきまして、大変驚いております。これからも38年間の様々な経験を、機会を見つけて書き続けて参りたいと思っております。

本当にありがとうございました。

〔梗概〕

一九七五年度に公立中学校教諭として採用され、以後三八年間、京都市の中学校で理科教員として勤務してまいりました。その間、学年主任などで担任を外れた時期を除き、三〇数年の担任経験の中から、いじめ問題の解決に向けて自分なりに実践してきたことを、二〇〇二年四月から二〇〇五年三月まで、三年間で二二七号発行した学年だよりに記載していたものの中から、下記の五点（資料一〜五）を取り上げ、自身の具体的な実践を報告し、さらに解決に至ったポイントなどを考察したものです。

また資料六「一日の反省プリント」では、担任としての毎日の継続した取り組みの中で、いじめの芽をどのように発見していくか、その手立て、そして生徒の実態に即してどのように対応していくか、を考察したものです。

はじめに

今、学校教育の中で、いじめの問題が大きくクローズアップされています。ただこの問題は今に始まったことではなく、古くからの課題でもあります。自死というような最悪な結果になった場合、新聞やテレビで大きく報道され、多くの国民の知るところとなります。しかし、このような最悪の結果にならないければ、大きく世間に知れ渡ることはありません。世間の多くの人々が知らないと言っても、いじめが無いわけでは無いし、また無くなったわけでもありません。

私は、一九七五年（昭和五〇年）から二〇一三年（平成二五年）までの三八年間、中学校の理科教師として教鞭を取って参りました。その三八年の教員生活のうち、学年主任などで担任を外れたことはあるものの、三〇年以上は担任として、約千数百名を担任してきております。様々な生徒に接し、様々な対応をして参りました。三八年間の担任としての経験だけは十分にあります。いじめ問題は、学校としての組織的な対応、取り組みが重視されることは言うまでもありません。しかし、経験に負うところも大きな位置を占めております。

いじめの問題が深刻化しもはや緊急事態とも言えるこの状況を改善し、いじめを無くすために何かの役に立つのではないか、との思いで三八年間のささやかな実践を報告したいと思えます。特に現役の若い先生方に読んでいただきたいと思っております。

資料一「大菅先生の回想より」

… 学年だより二〇〇二年四月二二日号より

それは、校外学習の班を決める時のことでした。本来私は、好きな者同士、という決め方は嫌いで、あまりやりません。好きな者で集まれば、それはややもすると、嫌な者は「あっち行け！」となるからです。その

学年のそのクラスの時、「話し合いで班編成ができるか？」と聞くと、みんなから「できます！」という返事が返ってきました。そこで、それなら「班編成は、みんなにまかす」ということで、「決まれば男女それぞれ、後ろの黒板に書いておくように」伝えました。朝の学活で。

そして、その日の終学活で「ちゃんと決められたか？」と聞くと、「決められました」という返事。しかし、ふとT君の顔を見ると非常に陰しく、今にも泣き出しそうな顔をしていました。終学活の後、T君を呼んで話を聞くと、「みんな班編成の時、話はしてくれなかった。そして昼食後の黒板を見ると、一班のところと自分の名前が書いてあった。ところが、昼休みの後教室に戻ると、三班のところと名前が入っていた。そして六限の後に見たら、四班のところに入っていた。」という話でした。T君いわく「俺はどうでもええのんか！ 勝手にどこへでもみんなの都合であっちに入れられたり、こっちに入れられたりするのんか！」と怒っていたわけです。そこで私は、「それなら先生も納得がいかん」「もう一回決めなおすぞ！」と言いました。しかしT君は、「僕は別に誰と同じ班になってもかまへんし、もうこれでええ」と言いました。さらに、「また決め直すと文句を言ったら、また後でみんなからごちゃごちゃと嫌なことを言われるし、先生もう言わんといて！」と言いました。私はとりあえず、「わかった」と答えました。しかし「わかった」とは言ったものの、私の腹の虫が治まりません。ほとんど眠れないまま朝を迎えました。

そして、朝の学活で教室へ行くなりみんなの前で、「こんな班編成やめじゃ！」と怒鳴ってしまいました。もちろんT君も教室にいました。「なぜT君が昨日の学活であんな顔をしていたのがわかるか！」から始まって、「おまえらのやってることは、いじめや！差別や！」と、朝の短学活から延々と喋り続けました。そして一限が終わって、T君と話をしました。私は「やっぱり言うてしめた、すまん。言わんとこ、と思っただけ、あまりにも腹が立って、言わな治まらんかった。もう、しゃー

ないわ、また変なこと言われたり、いじめられたら俺に言え、俺が守つたる。二人で何とかしよう」というような話をしました。T君は「ありがとう」と言って、笑っていました。

その後、T君に対するクラスの生徒の態度、姿勢は変わりました。私がかもう何を言うまでもなく、班編成もクラスのみんな（全員）で、みんな（全員）が納得するように、女子やおとなしい子など、そのほか弱い立場におかれやすい生徒のことも考えて話し合いをしながら決めていきました。私のいない所でT君に対するいじめや、いやがらせなどを心配していたのですが、私の心配とは裏腹に、クラス全体もお互いに人のことを考えられるようになり、みんなたいへん仲良く、温かい雰囲気の中に入りに、友達もでき、明るくそして楽しそうな表情に変わっていきました。：やっぱり一晚悩んだけれど、「あれは言ってしまった良かった」と思っています。結果的にかもしれないけれど、T君の状況をどう打開するか、その手立てが少ない中で思い切ったことがよかったと思います。

この話は、教師と生徒では立場が違うわけなので、生徒同士では、同じようにはいかないことも多いと思います。しかし「いじめられている人がいた時、見てみぬ振りはとんでもできない」その通りです。ではそれを、勇気を出して行動に移しましょう。仮に「やめて」の一言が自分には言えなくても、ほかにも色々方法があるはずですよ。親や先生、友達に相談するのも一つの方法でしょう。知っていて、黙って見過ごせばやはりそれは、いじめを認めていることになるのではないのでしょうか。ほんの少しの勇気で、大きく世界は変わると思うのです。

(終わり)

これは中学校二年生男子の事例です。私が男で、生徒も男であったため、うまくいった例になったと思っています。これがもし女子生徒だった

たら、こんな対応ができたかどうか自信はありません。＂これぐらいは＂とか、＂もう少し様子を見て＂も大事なのですが、うまくいくか？ いかないか？ いかなかったときの対応をもちろん考えて、思い切ってぶつけてみることも必要だと思います。恐らく他の生徒は、「そんなつもりではなかった」と思っていたかもしれません。しかし、このような教師の強烈な指摘で、自分の言動が人を不愉快な思いにさせているということに気付く場合もあるのです。冗談のつもり、ふざけのつもり、でもこれが人を傷つけていないか？を考えて自分の言動を振り返ることができるようになると思うのです。意図的にそういうふうに着ていくことが必要だと思います。

資料二「今年一〇月、合唱コンクールが開かれます」

：＂学年だより二〇〇二年七月二日号＂より

中学校では、毎年秋の文化祭の取り組みの一つとして、合唱コンクールを行っています。このコンクールに先立って、各クラスの合唱曲を決めたり、指揮者、伴奏者を決めたりすることになります。毎年この時期が来ると思いますが、それは今から二三年前のことです。

三年生の担任をしていて、学活で指揮者、伴奏者を決めようとした時のことでした。伴奏は、言うまでもなく曲に合わせてピアノを弾くことです。これは、ピアノを弾けない人には、練習をしたからといって、容易にすぐできることはありません。やはり経験のある人でないと無理なことです。私はクラスで、「ピアノ伴奏をやってくれる人はいませんか？」と問い掛けました。そして「これは、ピアノを弾ける人しかできないから、ピアノを弾ける人は手を挙げて下さい」とも言いました。しかし誰の手もありません。私は音楽の先生に聞いて、誰が弾けるかは知っていました。弾ける人はいるのです。もう一度同じことを問い掛けました。しかし手が上がりません。何度問い掛けても反応はありません

でした。私はついに頭にきました。「もうええ!! おまえらはピアノ伴奏がないわけやから、伴奏なしの手拍子でいける『炭坑節』にしろ!」と言いました。そして「しかしそれでは音楽の先生に叱られる」「クラスが困った時に頑張るのが学級委員長や!!」てなわけの分からぬことを言つて、男子学級委員長のT君を指差して「おまえやれ!!」と言いました。T君はきよんとした表情で「僕がですか?」と問い返しました。「そうや!お前や!!」私はこの時、当然T君は「ピアノを弾いたことがないのでできません」という返事をすると思っていました。そうしたら、ピアノを弾ける生徒が手をあげるだろうと思つたのです。しかしT君は「やってみます」と答えたのです。今度は私の方がびっくりしました。

その日からT君は、毎日放課後、音楽の先生のところへ行つて特訓を始めたのです。しかし、T君はピアノが弾けないだけでなく、楽譜すら読めないのです。学級委員長も「声がでかい」(号令をかける時に都合がよい)ということだけで、やんちゃなT君を私が指名したのです。しかし彼の特訓は続きました。楽譜は関係なく、音だけをとって弾く、という方法で約二週間練習をしたそうです。そしていよいよ合唱コンクールの当日がやってきました。私は「おまえらなあー、Tは毎日、放課後残つて特訓してきよつた。必死で練習して弾けるようになりよつた。おまえらも、Tのように必死で歌え!!」と言いました。体育館に入つて整列した時、先頭(学級委員長は前)にいるT君は、緊張のあまり顔面蒼白、全く無言で下を向いたままじつとしていました。歌う順番が来て、ステージに上がる時、私は一言「おまえはできる!」と言いました。そして、無事に伴奏を終えてステージを降りてきたT君は、私に一言「ありがとうございました」と言つて、席に戻っていきました。

結果は金賞(その学校は当時、三年生は一〇クラスあり、その中で優勝)でした。結果はともかく、T君は本当によく頑張りました。そして全くピアノを弾けない人に、その役(伴奏)がまわつたことを、他の生

徒も、そしてピアノを弾けた生徒も、「悪かったなあー」と思ったことだと思えます。だからこそ、T君の頑張りにみんなが応え、結果、みんなは全力で合唱したのだと思えます。私のひよんな一言から、T君には多大な迷惑をかけましたが、このことでT君も「やればできる!」という大切なことを学んだだろうし、他の生徒も、集団の中で自分の果たすべき役割をしっかりとやり遂げることの大切さを学んだと思います。選択曲、伴奏者、指揮者を決めるだけではなく、人に押しつけて終わりではなく、自分の果たすべき役割（伴奏者は伴奏をしっかりと、指揮者は指揮をしっかりと、そして何よりも歌う人が自分のパートを責任を持ってしっかりと歌う）を果たすことが大切だと思います。

(終わり)

いじめには当然、被害者と加害者がいます。「いじめがある」ということは、いじめられる側の人間といじめられる側の人間が存在するわけです。いじめの問題は、いかに早く発見し、いかに素早くそれに対応するか、ということがよく語られます。それはそのとおりで間違っていないと思います。しかしすべての人間が、いじめられる側に立たなければ、元々いじめは存在しないわけです。したがって、いじめが起こらないように、いじめられる側に立たない生徒を育てていくという取り組みが重要だと思います。

人の命をも奪ういじめは、許されない行為ですから、厳しく指導しなければならぬと思います。最近の風潮では、厳罰化が叫ばれることが多くなっているようですが、厳しく指導することももちろん必要なのですが、厳罰化ただそれだけでは問題は解決はせず、陰湿化など別の形で現れてくることも多いと思います。ただ、いじめられる側にいる生徒もその学校の生徒なのですから、きちんと育ててやらなければならぬのです。特にそのような行為に及ぶ前に、「人を大切にすることはどうということか?」「集団の中で生活していくには何が大切なのか?」などを、しっ

かりと指導し、心を育て続ける粘り強い指導が大切だと思います。

私の経験から、いじめられる側に立つ生徒は、往々にして何らかの問題を抱えている場合が多かったように思います。いい意味でも悪い意味でも、他の生徒に対して影響力のある生徒なら、その力をいい意味でのリーダーシップに変えてやり、それが発揮できるような環境を作ってやるというように、その生徒の持っている力をいい方向に導いてやるのが重要だと思います。この資料二で書いたT君も、やんちゃで、他の生徒に対して大きな影響力のある生徒でした。状況や環境が違えば、いじめられる側に立っていた生徒であったかもしれない。しかし学級委員長を務めることで、自分の存在が他の生徒に認められ、彼の中に自己肯定感が生まれ、彼自身がクラスにおけるポジションを自覚することができたと思えます。そしてさらに、合唱コンクールで伴奏者としての、彼の努力や活躍が教師やクラスの仲間に評価されたことによって、彼自身が自信を持つに至ったと思います。そのことにより、より広い視野が持てるようになり、彼の影響力がさらにいい方向へ（クラスのみんなのために）導かれ、いい意味でのリーダーシップが発揮できるようになったのだと思います。その後、クラスの仲間に信頼され一年間、学級委員長を続けることになったのです。少しずつまわりにも気を配れるようになり、女子や弱い立場に置かれやすい生徒など、クラス全体に視野を広げ、いじめられる側どころか、そういったことを注意する立場の存在となっていったのです。いじめの発見や対処も大切なことですが、すべての生徒を「いじめられる側の立場に置かない」ような学級経営が必要だと思います。

資料三「最近の授業は?」

…「学年だより二〇〇二年六月二四日号」より
最近、授業の中でこんなことはありませんか。「A先生の授業は静かだが、B先生の授業はうるさい」。こんなことが、学級日記に書かれていま

せんか？「A先生は男の先生でこわいから、みんなちゃんとしている」けれど「B先生は女の先生だから、みんなふざけたり、しゃべったりしている」と。しかしよく考えてみて下さい。これは、たいへんおかしいことですね。多くの問題を含んでいる答えだと思います。同じ注意を男の人が言う時は、聞く。女の人が必要に注意していても、聞き流す。それは、男には力があるという、今日の男性中心の世の中の社会意識として存在する差別意識ではないですか？我々はみんな「差別はいけない」「いじめはいけない」と言います。そして「僕は、私は、差別なんかしていない」「いじめなんかしていない」と言います。しかし、知らず知らずのうちに、女性をバカにしてしまう意識が、差別意識なのであり、それに気付いていないだけなのではないでしょうか。またそのことは、学校の中で、クラスの中で、力のない子（例えば勉強ができない、スポーツができない、健康に恵まれない、貧しいなど）をからかったり、バカにしてしまう意識と全く同じではないですか？あなたにはこんな意識はありませんか？

またテストを返した時、よくこんなことがあります。「先生、平均点はいくらですか？」と聞く生徒。先生が「〇〇点です」と答えると、「良かった！」というざわめき。何が良かったのでしょうか。それはつまり、自分より点の悪い、勉強のできない人がいて「良かった」、自分より下の人を見て「良かった」という差別意識の現れなのではないでしょうか。男の先生のドスの利いた声で言われようと、女の先生の優しい声で言われようと、悪いことは悪いのです。男の先生なら言うことを聞く、女の先生なら言うことを聞かない、これが差別なのです。ムチで調教される牛や馬ではなく、人間なら人間の言葉（注意）に従う。一人ひとりがこんな意識や感性を持つことが大切であり、同時にすべての人を大切にできる雰囲気（クラス、学年、学校）にしていかなければならないと思います。いじめがあった時、それを「見てみぬふりをしていたら、そ

れはいじめているのと同じだ」とよく言います。

「いじめはいけない」「差別はいけない」「いじめをなくそう」「差別をなくそう」と言うなら、一人ひとりが行動を起こしましょう。お互いに注意し合いましょう。誰かに押しつけるのではなく、自ら立ち上がることです。これが、みんなの学習権。すなわち日本国憲法第二十六条（教育を受ける権利）を守ることになるのです。これが守らなければ、人権侵害すなわち差別なのです。塾へ通ったり、家庭教師に習ったりしている生徒（友達）ばかりではないのです。何にも頼らず、自分一人の力で学習に励んでいる生徒（友達）も多くいるのです。その人達の学習権を保障（守る）することが差別をなくすことなのです。

「いじめや差別はあるのです。」

しかし、それに気付いていなければ、

無くすことなんてできるわけがない…。

また一人それで悲しむ人が出るのです」

（終わり）

「授業中さわがしくなる」ということは、どこの学校でも、またどのクラスでもよく起こり得ることだと思います。ただこの時に、単純に怒って（指導して）終わりにするのはなく、なぜ悪いのか？いじめや差別、人権の観点からゆっくり説明してやるのが大切だと思います。このことが「自分の言動が他人（クラスの仲間や教師など）の人権を侵害していないのか？」を振り返らせるいいチャンスとなると思っています。このように、生徒の日常の何気ない会話、行為などの中に課題のあることが多いのです。それを簡単にスルーしてしまわず、見逃さず、ほんのわずかな課題をも感じ取る感性を持つことが大切です。そしてその都度、その課題を取り上げて、それを生徒のものにしていく指導が必要になると思います。

「平均点いくらですか?」「良かった!」これも、定期テスト後のテスト返して、どこの学校でも、どの教科にでも見られる会話だと思います。もちろん、平均点を発表することが悪いものではありません。ただ平均点は何のためにあるのか? それをどのように使うのか? さらにそれを自分のために、どのように生かしていけばいいのか? を指導した上で知らせることが大切です。このような指導をきちんとしていないと、後に「あいつアホや!」というような、他の生徒を馬鹿にする、蔑むような発言を生んでしまうのです。このような発言が、平気で通るような雰囲気クラスになると、勉強のできない生徒がいじめられる土壌ができてしまうと思うのです。

また学級日誌や班ノートなど不特定多数の生徒の書いたものの中にも、指導しなければならぬ題材、課題が含まれていることが、けっこう多くあります。このようなものをうまく利用しながら、「自分の言動が、他人の人権を侵害していないか?」を常に振り返る姿勢を身に付けさせていくことが重要だと思います。

資料四『やさしさとは?』

：「学年だより二〇〇二年六月一四日号」より
人に対するやさしさとは何だろうか? 四〇人の人間がいれば、おのずと四〇通りの物の考え方があろう。これは、あつて当たり前である。あなたが、あなた以外の三九通りの考え方を認められることが大切なのではないだろうか。たとえば、スポーツの好きな人、得意な人がいる。そして逆にスポーツが嫌いな人、不得意な人もいる。歌のうまい人がいる、一生懸命歌うが、へたな人もいる。また、勉強のできる人がいる、努力してもなかなか勉強のできない人もいる。それがスポーツのできないかと、「どんくさい!」「へたくそ!」。歌がへただったら、「オンチ!」。勉強ができないから、「あいつ、アホや!」というふうには、相手をののしっ

ていないだろうか? あざ笑っていないだろうか? また陰でこそそそ言っていないだろうか?

よく見る光景にこんなものがある。球技大会でバレーボールをやっている時、バレーがうまくない人がいた。その人のところへボールが飛ぶ。失敗する。すると「何やってんの!ちゃんとやり、あなたのせいで負けるやろ!」という罵声が飛ぶ。罵声を浴びせられた人はなお緊張する、そして不安な気持ちになる。またボールが来る。緊張のあまりまた失敗する…。この後は、どうなっていくかわかるだろう。そこで考えた。一〇回ボールが来て、八回失敗する力の人に罵声を浴びせて、「へたくそ!」とののしって一〇回とも失敗するより、「次はがんばれよ!」「私がかバーしてあげるから。」「失敗しても気にするなよ!」「どんまい、どんまい」などと言ってあげることにし、その人が一〇回のうち四回成功したらどうだろう。その人とあなたを含めチームが勝つ、という目標に一步近づけるのではないだろうか。私は、ここに「やさしさとは何か?」のヒントがあると思う…。

決して勝つためにやさしい言葉をかけるのではない。励ましの言葉をかけるのではない。一つの目標に向かってみんなで取り組んでいる、という自覚が生まれた時に、その言葉は出る。やさしさの表現が生まれる。決して自分一人でやっているのではない。また生きているのではない。ひとりよがりではない。自分もまわりの人間に支えてもらい、また自分もまわりの人間を支えて生きている。それがわかって初めて、人間はやさしくなれるのではないだろうか。ここで言うやさしさとは、やさしい言葉をかけるだけの単純なことではない。自分のことだけではなく、人のことも考えられるか、ということだ。すなわち、やさしさとは「人のことを考えられること」ではないか。自分の考えを人に押しつけ、自分勝手に行動して生きていくのではなく、いろいろな考え方をしていることを理解し、それらの人とともに生きることの必要性、重要性を

理解することが大切ではないだろうか。やさしさの表現は、時には厳しくなることもあるだろう。相手（友達）のことを本当に考えたのなら、悪いことは「悪い」とはっきり言い切る言葉が出るはずだ。それが相手に対する本当のやさしさの表現ではないかと思う。

（終わり）

学校では一年間を通して、球技大会や体育大会、合唱コンクールそして文化祭というような大きな行事が行われます。これらの行事は、生徒が持っているそれぞれの個性を発揮できる機会でもあります。個性を発揮することは、とても素晴らしいことなのですが、集団の中では、ややもすると独り善がりの発言や行動が出てきたりすることも多いのです。

クラスの中には、少なからずスポーツが苦手な生徒、歌が苦手な生徒、人前で話すことが苦手な生徒もいるわけです。そこでこのような行事をうまく使って、他人のことを考えられるように指導してやるのが大切だと思えます。これがいじめを生まない雰囲気のクラス、みんなにやさしくまとまりのあるクラスをつくるチャンスなのです。これがうまくいかないとき、クラスの中に人をバカにする空気が生まれ、いじめの起こりやすい土壌が醸成されてしまうことがあります。それだけではなく、これをきっかけに、このような行事を欠席したり、場合によっては、不登校になったりすることもあります。

できる子もできない子も、得意な子も不得意な子も、それぞれの生徒が伸び伸び取り組める雰囲気のある温かいクラスをつくる。そのために「クラスの仲間一人ひとりのことを考える」という大切なことを、行事を通して教えてやる必要があると思えます。

資料五 「あなたはどう思いますか？」

：「学年だより二〇〇二年七月一六日号」により
先日、このようなことがありました。あなたはどう思いますか？ A君とB君の会話です。A君は、みんなと違うこと（ここに物を置かない）を、ついやってしまいました。するとB君は、「置いたらあかんて言うたやる！何聞いてんねん！」「おまえ日本語わからへんのか！おまえ何人（なにじん）や！」という発言をしました。この会話は、A君がみんなと違うことをついやってしまったことに対して、「ちゃんと聞いてわけです。しかし、A君がやってしまったことに対して、「ちゃんと聞いてわけよ！置いたらあかんやる！」で済むわけですね。「おまえ何人（なにじん）や？」という発言は、明らかにおかしいのです。たとえば日本に旅行に來ている外国の人に「Where are you from?」と聞く場合はあります。しかしこの会話では、「おまえ何人（なにじん）や！」という言葉で、相手をバカにし、さげすんでいるのです。そういう使い方をしているのです。

例えば何人（なにじん）だと聞かれた時、その答えは、イタリア人、ブラジル人、中国人、アメリカ人、朝鮮人、ロシア人、オランダ人など、いろいろあるわけですが、「何人（なにじん）や！」と罵声を浴びせているわけですから、日本人以外のこれら外国人に対して「日本人ではないからダメなんだ」という偏見を持ち、さらに「日本人でないから言っていることがわからないんだ」と蔑視しているのです。これは、日本民族優位意識（日本人は良くて、他の国の人はダメ）に基づく差別意識です。六月六日号に書いた在日ブラジル人のエルクラノ君が、日本人に殺された事件は、明らかにこのような「在日」外国人に対する日本人の差別意識が、大きな要因になっているのです。このような発言による問題は、謝って「はい終わり」というものではないと思えます。確かにこの発言で、相手の人を傷つけているわけですから、きちんと謝るべきでしょう。

しかし言葉というのは、人間が話すわけですから、当然その人間には意識があるわけです。その発言（言葉）も悪いのですが、その言葉を発する意識に問題があるのです。

生徒（中学一年）であれば、生まれてこのかた一三年、私のような大人であれば四九年間、この社会から刷り込まれた差別意識が、垢のようにくっついておいた溜まる一方です。垢を落とす努力をしないとダメだと思えます。磨く努力をしなければならぬと思えます。それを怠ると、やがて無意識のうちに、口をつけてこれらの言葉が出るようになってしまいます。条件反射のようなものです。「アホ！バカ！」という言葉がその典型でしょう。私が良い例です。（決して開き直っているわけではありません）そして最近の「きつしよ」（きしよく悪いの短縮）という言葉もそうですね。何かあったら口について出てくることはありませんか？ あなたはもはや無意識のうちに発した言葉で、多くの人を傷つけてしまっているのです。これは恐ろしいことです。言葉に問題があるのではなく、その言葉を発する人間の意識に問題があるのです。あなたはどうですか？ しかし、普段多くの人は、それらの言葉を発することはありません。自分の立場がピンチになった時、苦しくなった時、追い込まれた時、相手を罵倒する時、腹癒せ、鬱憤ばらしをする時に、そのような言葉がでるのです。差別意識が頭をもたげるのです。その「相手を差別する、傷つける」言葉を使わないことはもちろんのこと、それだけで終わるのではなく、その言葉を発した自分自身の意識を、もう一度振り返ってみる必要があると思うのです。

（終わり）

これはクラブ活動の中で起こった会話です。これも日常よく起こり得る生徒同士の会話から問題点を引き出して指導をした例です。何気なく発した言葉かもしれないけれど、それを見過ごさず、どこに問題があるのか？単なる言葉狩りで終わるのではなく、自分自身の内にある差別意識に気付かせる指導が大切だと思います。

またこの事例は、学校におけるいじめの問題だけではなく、枠を広げて、在日外国人に対する我々の持つ差別意識へも目を向けさせることのできる良い例だと思います。在日韓国朝鮮人だけではなく、今やニューカマーと呼ばれる外国籍の生徒が、どの都道府県でも増えてきています。それらの生徒に対する「いじめや差別」の問題が発生しないように、指導できるチャンスでもあるのです。

資料六 一日の反省プリント「明日に向かって」

（明日も素晴らしい一日になるよう本日の反省をしよう）

一、あなたは、今日、嫌な思いをしましたか？

A、しなかった

B、した

（具体的にどんなこと…）

二、あなたは、今日、他の人（友達）に嫌な思いをさせましたか？

A、させなかった

B、させた

（具体的にどんなこと…）

三、本日の反省を書きましよう。

年 組 番氏名

滋賀県で起こった事件を契機に、二〇一三年『いじめ防止対策推進法』が施行されました。各学校では、その解決に向けて、「いじめ防止基本方針」を策定し、「いじめ対策委員会」を組織して具体的な取り組みを進めようとしています。その具体的な取り組みの一つに、生徒一人ひとりに「生活記録ノート」を持たせる、というのがあります。確かに生徒の実情を、担任が把握する手段の一つとしては、たいへん意味のある取り組みだとは思いますが。ただ私の経験から、いじめの問題については、教師や親などの大人を含め、周りの人間に知られることを極端に嫌がる場合が多いと思います。理由は色々あると思いますが、自分の弱い面を見せたくない、親に心配をかけたくない、自分ひとりで解決したいなどでしょう。そしてさらに、親や教師にいじめの事実を告げたことがわかった時、「ちくった！」（親や先生に告げ口をした）として、さらにいじめが酷くなる、という不安が大きくなると思うのです。したがって紙に書かすのなら、絶対に他の人に見られないような配慮が必要だと思います。今や人（いじめのターゲットになっっている）の机の中や、鞆の中などを平気で見ると、もしいじめの事実の記入が他の生徒に見られたり、「ちくった」となると、その後の状況はより過酷なものとなることとが予想できます。もちろんその発覚で指導はできるものの、その指導がまずければ（うまく入らなければ）、さらにいじめは陰湿化し、解決と

はほど遠くなってしまう危険もあります。ですから書かせるのはいいけれど絶対に見られない確実な配慮が必要となると思います。

そこで私の場合は、資料六の「一日の反省」を記入する「明日に向かって」という、B5判の小さなプリントを、帰りの学活（終学活）の終わりで一分で生徒に書かせていました。記入後、二つ折りにして後ろから集めます。何も書かなくてもよく、ただ〇を付けるだけです。その〇も書いてなくてもいいのです。誰かに見られて困る生徒は、何も書かないことが多いのです。それでいいのです。「何も書いてない」ことが分かれば、「何かある」ということで、掃除の時、部活動の時、電話で、家庭訪問などで必ずその生徒とコンタクトを取り、指導に入ります。このように他の生徒には、絶対に分からないように配慮しながら、情報を掴む工夫が担任として重要なことだと思います。

おわりに

いじめの問題が起こった時、「いじめたのは誰か？」を聞いても、加害者が現れないことが多くあります。いじめられている人がいるのに、いじめている加害者がいない、というおかしなことがよくあります。加害者に聞いてみると、「そんなつもりではなかった」「ほんの冗談でやっただけだ」「ちよつとふざけただけだ」というような答えが返ってくることも多いのです。すなわち「他人の足を踏んづけている」のに、その意識がないわけです。「踏んづけている」という意識があれば、足をどけて相手に謝ります。そうすればいじめはなくなるわけです。しかし、加害者に「他人の足を踏んづけている」という自覚がないわけですから、いつまでも「踏んづけたまま」なのです。踏まれていて人間はずっと痛みを耐えなければならぬのです。したがって「自分は他人の足を踏んづけていないか？」を常に考えるように指導しなければならぬと思

ます。

今回、掲載した資料一〜五は、私が学年主任をしていた時に発行していた学年だよりの一部です。学年主任となつて、担任を外れた二〇〇二年四月九日の第一号から二〇〇五年三月一日（卒業式）まで三年間に二二七号を発行しました。三年間の授業日数が五九一日でしたので、二・六日に一枚、すなわち一週間に約二枚の割合で発行したことになります。この学年だよりで題材として取り上げたテーマは、次のようなものでした。

- 同和問題
- 障害者問題
- 在日韓国朝鮮人問題
- 在日外国人の人権
- 男女差別
- 公害問題（水俣病・イタイイタイ病）
- ハンセン病問題
- 日本と朝鮮のつながり
- アイヌ民族に関する人権問題
- 被爆者問題
- 沖縄戦
- いじめの問題
- 犠牲とは
- 戦争犯罪
- 学校間格差
- オーストラリア先住民族アボリジニー
- 中国人強制連行
- カースト制について
- 言葉の暴力
- 第五福竜丸被爆事件
- 沖縄の土地闘争

このように人権に関わる問題は、日常生活や毎日の新聞、ニュースの中から、次々と湧き出る泉のごとく現れてくるのです。これは「残念ながら」と言うべきでしょう。その多くが解決されるわけではなく、形を変えて、時を変えて、我々の前に現れてくるのです。

現在の日本社会では、いじめの問題は、学校だけにとどまらず。一般の会社内などの大人の世界にも多数存在します。時には自死に至ったケースが新聞やテレビなどで報道されることもあります。このように我々が日々生活している日本社会は、差別の構造社会であることをしっかりと自覚しなければならぬと思います。いじめの問題は、早期発見・

即指導と素早く対処し、撲滅を図るのはもちろんのことです。しかしそれだけにとどまることなく、我々大人も含めすべての人間が、差別の構造が社会の中で生きていることを自覚し、常に自分が加害の位置にいないか？ 他人の足を踏んづけていないか？ 差別する側に身を置いていないかを意識し、考えながら生活しなければならない、ということも並行して、生徒達に教えていかなければならないと思います。